



## エピローグ

科学技術をめぐる体制が、大きな曲がり角にきている。団塊世代エンジニアの大量流出、若者の理工系離れ、子どもたちの理科離れが進む一方、過去10年に40兆円、今後5年に25兆円と、厳しい国家財政の中で大きな比重を占める政府科学技術予算への懐疑の声もある。こうした状況は、日本に限らず先進諸国共通のものとしてある。

言い換えれば、人々は20世紀のように科学技術に夢やロマンを感じたり、未来を託すような気持ちを抱いたりはしていないにもかかわらず、複雑化する社会において、科学技術の重要性はいつそう増しているということである。サイエンス・コミュニケーションの潮流は、科学技術と社会との関係の根源的な問い直しの表れであり、時代の必然といえる。

## 最適化社会から自律社会へ

情報化社会→最適化社会

脳のアナロジーとしての情報処理  
言語情報の優位  
静的な知識観  
環境から切り離された知

脱工業化社会

統合→分散モデル

自律社会

身体性のアナロジーとしての情報処理  
言語と非言語の統合(センシング、ア  
ウェアネス)  
ダイナミックな知識観(知識創造)  
環境に埋め込まれた知(アフォーダンス)

知識社会+リスク社会(自己責任、多様  
な価値観)

自律協調モデル

本冊子では、こうした動きを「知識社会」や「自律社会」への、人々の価値観や行動規範の変容という、より大きな視点から捉えることを狙った。自律社会においては、科学技術の問題が、個々人の自己責任によってポトムアップで解決されていくような社会ビジョンが必要である。個と個の間の議論の相互作用が活発になされる中で、互いの問題を自浄的に解決していくことが志向される。そのような相互作用の中で、「知識創造」あるいは「知の価値化」がなされ、創造的なイノベーションが生まれていく。

自律社会においては、科学技術をめぐる「光と陰」が、別々にはなく、同じ土俵で議論され、問題解決や意思決定が志向されていくことが理想である。

自律社会では、こうした相互作用を支える個の「センス」が重要となる。自律社会を知識社会としてみたとき、それは「認知社会(Cognitive Society)」あるいは「知覚社会(Sentient Society)」と理解すべき現象として捉えられる。そのような社会を生き抜くためのリテラシーとは、言語や論理を操る能力と、言葉にできない価値を感知する能力とが統合された力であり、そうし

## 自律社会を生き抜くリテラシーとは

知識社会としての自律社会とは…

「認知社会 (Cognitive Society)」あるいは  
「知覚社会 (Sentient Society)」と理解すべき現象

自律社会＝知識社会を生き抜く3つのリテラシー

- ① 個性的な認知能力
- ② 言語に偏重しない身体性のコミュニケーション
- ③ 他者や環境との相互作用の中での創造的活動

た個性的な認知能力の下で、異質な価値観や異質な世界とのコミュニケーションを積極的に行い、新たな価値を創造していく力である。

本冊子では論じていない教育についても、こうしたリテラシーを支援していくことが求められる。認知や身体性を重視した人づくりには、生きた社会、生きた人間関係を通じた広義の「学習」の概念が、よりいっそう重要になる。

●  
科学技術が今後もなお、専門知を結集し、好奇心やロマンのエートスを守り続け、多額な資金を必要とするならば、科学技術と社会、産業、市民との間に、新たな「信託関係」を築き上げなければならない。

2006年は、グローバル化社会と科学技術をめぐる公論形成を議論する「P C S T (Public Communication of Science & Technology)」のアジアで初の国際会議が6月にソウルで開かれ、日本では初のサイエンス・コミュニケーションの祭典「サイエンス・アゴラ2006」が11月に東京で開催された。前者は、世界中から学者、ジャーナリスト、NGO、政策担当者など、多様なメンバーが集い、「Scientific Culture for Global Citizenship」のテーマの下に議論がなされた。後者は、国内でサイエンス・コミュニケーションに関心を持つ人々が集い、交流や発表を行った。

科学技術に関わるすべての人や組織が、こうした時代のうねりを鋭敏に感知し、科学技術の新たな公論形成の場が広がっていくことが期待される。

